カムイと共に生きる上川アイヌ（北海道）

上川アイヌが自然とともに暮らす 大雪山を望む「神々（カムイミンタラ）が遊ぶ庭」

北海道の中央部の大雪山や、その山を水源とする石狩川が流れる上川盆地。ここには古来より先住民の上川アイヌたちが、自然を神と崇め、川を水運の道としながら暮らしてきました。今なおこの地に息づく彼らの伝統文化は2018年、日本遺産に登録されました。

北海道最高峰の旭岳／神居古潭には神と魔人の戦いの場という伝説が残されています（右）

然別湖には固有種のオショロコマが棲息

代表的な北海道土産、木彫りの熊はアイヌの民芸細工

旭川市博物館にもアイヌに関する展示があります

神が住む北海道の大自然

アイヌ語の「ペニウンクル＝川上の人」がその名の由来である上川アイヌは、石狩川の上流一帯に集落（コタン）をつくり暮らしてきました。自然という神（カムイ）と共生してきた彼らは、川を「山へ遡る生き物」と考え、それゆえに石狩川の水源のある大雪山は、神の国に最も近い「神々が遊ぶ庭（カムイミンタラ）」として崇拝されてきたのです。

ガイド養成、コースの整備へ

日本遺産の構成地域は上川町、旭川市、富良野市、愛別町、上士幌町、上富良野町、鹿追町、士幌町、新得町、当麻町、東川町、比布町の2市10町と広範囲にわたります。そのなかには北海道最高峰の旭岳（2291メートル）や層雲峡、高山植物が咲く十勝岳、大雪山の東に広がる三国峠の大樹海、堰止湖として固有種が住まう然別湖など、北海道の著名な景勝地のほか、最古のアイヌ博物館「川村カ子トアイヌ記念館」やフクロウ神事といった祭礼などが構成文化財となっています。

「日本遺産登録を通し、これらの地にまとまった物語があることを、地元の人たちに知ってもらおうと思った」と語るのは上川町産業経済課副主幹の吉田進氏。まずは構成地域で大雪山麓上川アイヌ日本遺産推進協議会を立ち上げ、地元の認知度・理解度向上を狙いシンポジウムなどを実施。さらに次の段階として、旅行会社や個人旅行客へ向けたモデルコース造成を狙い、家族層を対象にモニターツアーを行うほか、「説明がなければ分からない素材。ガイド養成など人材育成を重要課題として取り組んでいく」としています。

2020年4月24日 アイヌ文化発信地「ウポポイ」誕生

北海道白老町にアイヌ文化の振興の拠点となる施設「ウポポイ」がオープン予定。内閣官房アイヌ総合政策室長（内閣審議官）の刀禰俊哉氏がJATAを訪れ「ぜひツアー素材に」と語りました。

上川町吉田氏も「ユーカラ街道として北海道各地のアイヌ文化圏を結ぶ構想もある。そうした部分などで互いに協力できれば」と話しています。